

2025年度 釧路市立高等看護学院 自己点検・自己評価結果報告

厚生労働省の指針である「看護師等養成所の教育活動等に関する自己評価指針作成検討会」報告書に基づき、自己点検・自己評価委員会を発足し、教職員を対象とした評価を行った。

評価は「Ⅰ. 教育理念・教育目的」「Ⅱ. 教育目標」「Ⅲ. 教育課程経営」「Ⅳ. 教授・学習・評価課程」「Ⅴ. 経営・管理過程」「Ⅵ. 入学」「Ⅶ. 卒業・就業・進学」「Ⅷ. 地域社会／国際交流」「Ⅸ. 研究」の9カテゴリー106項目に基づき、教職員を対象に5段階リッカート尺度（「そう思う：5点」、「ややそう思う：4点」、「あまりそう思わない：3点」、「そう思わない：2点」、「わからない：1点」）を用いて点数化し、平均値を示した。結果については資料1参照。

「Ⅰ. 教育理念・教育目的」は概ね肯定的な評価であり、全体の平均は4.5となった。策定したアドミッションポリシー、ディプロマポリシーは、学生便覧等で学生に周知できるように取り組みを行っている。今後も、教育理念と卒業時到達目標とのつながりを明確に示しながら、学生が看護師として求められる資質・能力を段階的に身につけられるよう、教育内容や指導方法を工夫していく。教育理念の浸透を通して、学生が卒業時に求められる看護実践能力に確実に到達できるよう継続的に支援し、教育の質向上に努めていきたい。

「Ⅱ. 教育目標」に関する評価の平均は4.5となり、前年度より0.3低下した。特に、看護実践者としての能力育成と学習者としての成長促進という二側面からの教育目標の設定に関する項目で評価が下がった。これは、学生の学習態度や基礎学力の面で課題が見られ、教育目標の理解や学びへの主体性が十分に結びつかなかったことが一因と考えられる。今後は、教育理念と学習活動の関連づけをさらに明確にし、学生が卒業時到達目標に向かって着実に成長できるよう、教育の質向上に取り組んでいきたい。

「Ⅲ. 教育課程経営」は平均4.1となり、前年度とほぼ同水準で推移した。学生の学びを確保するための取り組みは継続して行うことができ、教育課程の運営自体は安定していたといえる。一方で、授業準備や自己研鑽、教員間の相互研鑽に十分な時間を確保することは依然として課題であり、教育の質をさらに高めていくためには、教員が専門性を磨き合える環境づくりを一層進めていく必要がある。

「Ⅳ. 教授・学習・評価課程」の平均は4.1であり、前年度の4.4から低下が見られた。単位認定の公平性（4.8）や評価基準の明示（4.7）は引き続き高い水準となっている。一方で、学習への動機づけ（3.0）や個別の学習支援（3.2）が前年度から大幅に下落しており、組織的な指導方針の一貫性や、学生一人ひとりの状況に応じたきめ細かな関わりに課題があると考えられる。今後は、教員間での指導方針を再統一し、個別面談を活用しながら学習意欲の向上を図るとともに、学生が主体的に学べる環境づくりを進めていく。

「V. 経営・管理過程」の全体平均は4.0であり、昨年度の4.2から微減したが、概ね良好な運営が維持されている。管理者の教育理念の明示(4.7)は引き続き高く評価されており、組織の方向性は着実に浸透している。また、インスタグラム等のSNSを活用した新たな情報発信により、広報活動(4.3)も良好な評価を得ており、本校の魅力発信に繋がっている。一方、中長期計画の策定や実施状況(3.7、3.3)については、組織内での周知や理解の度合いに個人差が見られる結果となった。今後は、新任者を含む全員が本校の将来像を共通して持てるように、組織力の一層の向上を図る必要がある。

「VI. 入学」の全体平均は3.9であり、前年度の4.3から低下が見られた。数値の低下については、今年度の定員割れに伴い、学力や学習態度の面で課題のある学生が入学し、例年以上に修学継続に困難さを抱える学生が生じた実態を反映している。教職員の間では、定員確保と並行して、看護学修に適応可能な資質をいかに見極めるかという選抜手法の再考が必要との認識が高まっている。これを受け、今年度は指定校・公募推薦の導入や、一般、社会人・大卒等選抜の形式見直しなど、選抜方法の多様化と工夫を図った。今後はこれらの新たな入試形態の成果を厳密に分析し、教育の質を維持できる最適な選抜基準の確立を継続して目指していく。

「VII. 卒業・就業・進学」の全体平均は3.5であり、昨年度の4.0から低下が見られた。卒業時の到達状況や進路の把握(4.0)については、計画的な分析が継続されており概ね良好である。本校の特色として、卒業生アンケートの実施に加え、数年前より就職した卒業生の相談やストレス発散の場である「ちょこっと応援隊」を定期的に開催しており、卒業後の継続的な支援に注力している。一方で、就業先での評価把握(3.0)や活動状況の統計的分析(2.9)については、組織内での分析結果の共有や教育内容への具体的なフィードバックに課題が残る結果となった。今後は「ちょこっと応援隊」等で得られた貴重な現場の声や卒業生アンケート結果をより組織的に集計・共有し、授業展開や教育目標の更なる改善へと効果的に繋げていく必要がある。

「VIII. 地域社会／国際交流」全体の平均は3.7であり、昨年度の3.6を上回る良好な運営を維持している。特に、地域への情報発信(4.6)や地域資源の教育への活用(4.2)は高く評価されており、地域社会と密接に連携した組織的な貢献活動は本校の特色である。一方、留学生の受け入れ(2.2)等の国際交流に関する項目は低迷しているが、これは本校の教育的優先順位や学生ニーズを反映した結果と考える。今後は、国際的視野を養う授業内容を充実させつつ、強みである地域連携の質をさらに深め、地域に根ざした看護師養成を継続していく。

「IX. 研究」体の平均は2.8であり、昨年度の3.1から低下した。項目3の平均が2.7と低いが、これは日々の膨大な教務に追われる中で、研究に向き合う時間も精神的なゆとりも物理的に持っていない切実な状況を反映している。個人的な支え合いはあるものの、組織としての公式な相談体制(2.8)や時間的保障(3.0)が追いついていないのが実状である。今後は、組

織全体で業務負担の見直しを図り、少しでも研究に専念できる時間や環境を具体的に創出することが急務である。一人ひとりがゆとりを持って研究と教育を両立できる体制の再構築に注力していく。